

N-15

## ディベートを題材とした情報リテラシ科目の展開 Using Debate as a base for an Education Plan of Information Literacy

高永圭子† 魚田勝臣†  
TAKANAGA Keiko UOTA Katsuomi

### 1. はじめに

我々の情報リテラシ教育の理念は「目的指向および学生主体」である。情報リテラシ科目を個人の情報活動に関する常識を学ぶ科目と位置付けている。情報活動に関する常識とは、コンピュータの操作方法ではないと考えている。コンピュータはツールに過ぎない。つまり、情報リテラシでは、目的達成のための手段としてコンピュータの操作方法を身につけさせる。また、教師から一方的に教わるのではなく学生が主体となって情報リテラシを身に付けることが必要だと考える。そこで、ディベート実施を目標に据え、学生主体の授業を展開した。ディベートを題材としたのは情報リテラシの要素（読み、書き、話すなど）がすべて含まれているからである。本論文では上述の理念と題材で展開した情報リテラシ科目の全体像について述べる。

### 2. 情報リテラシとディベートとの関連づけ

情報活用の実践力を養うものとして情報リテラシ科目がある。情報社会への参画態度を養うものとしてディベートがある。高校ではこの2つをばらばらに取り上げている。大学生を対象に、2つを融合して講義に取り入れたいと考えた。

#### (1) 情報リテラシの要素と重要性

情報リテラシの要素として、「問題の発見、情報の収集、処理、伝達・発表、利用」があげられる。これらの要素は学生および社会人が情報活動を行うために必要不可欠なものである。

#### (2) ディベートの要素と重要性

日常生活において、様々な形の議論が行われている。企業での会議や友人や教授との意見交換がその例である。しかし、主張が曖昧だったり相手の主張を理解できずに、うやむやに議論が終わることも多い。その原因に論理的思考能力やコミュニケーション能力の欠如がある。これらの能力は正式のディベート（以下、ディベート：相手を打ち負かすために公式の場で形にはまって討論する）によって訓練できる。つまり、ディベートの要素を身につけていれば、日常生活において効率よく的確に議論できる。ディベートの要素として、「命題の設定、情報の収集・処理、論理の構築・主張」があげられる。これらの要素は、そのまま情報リテラシの要素に置き換えることができる。

ディベートと情報リテラシの要素が同様のものとして捉え得ることから、情報リテラシを身につける手段としてディベートを活用できると考えた。

### 3. ディベートを題材としたシラバスの展開

情報リテラシ科目は、半期15回で実施する。15回のうち2回を小テストなどにあてた。表1に13回分のシラバス案を示す。「講義目的」には身につけるべき情報リテラ

シを示し、「ディベート作業」には対応するディベートの作業項目を示した。講義目的とディベート作業から、講義内容を展開した。

表1 2002年度シラバス案(本体)

回	講義目的	ディベート作業	内容
1	イントロダクション		情報リテラシの重要性、情報ツールの活用、通信手段の確立、今後の進め方
2	イントロダクション		ディベートの説明、ディベートVTR視聴
3	行動計画	作業計画	行動計画、手帳とメモ、各自計画書の作成
4	問題発見能力、論理的思考能力	論題分析	問題解決の概要と手順、論題分析と仮立論(グループディスカッション)
5	情報収集能力	資料収集	情報の収集と整理、インターネットを利用した情報収集
6	情報収集能力	資料収集	情報の収集と整理、図書館での文献収集(グループ作業)
7	情報処理能力	資料分析	データ分析の重要性と方法、グラフや表計算ソフトの利用
8	論理的思考能力、論理的表現能力	立論構築	レポート作成への導入(箇条書き、ビジュアル化の演習)、立論提出
9	論理的思考能力、論理的表現能力	反論準備	ワープロソフトの活用、チーム決定、反論準備(グループ作業)
10	論理的表現能力、コミュニケーション能力	実施準備	発表の重要性と方法、プレゼンツール、ディベートのためのスライド作成
11	コミュニケーション能力	実施準備	チーム内ディスカッション、最終準備
12	コミュニケーション能力	ディベート実施	対戦発表、ディベート実施、見学
13	論理的思考能力	ディベート講評	ディベート講評とディスカッション、総括

文部科学省があげている情報科目に有効な学習形態を取り入れた。第1,3回の課題を個別学習型に、第4,6,9~11回の講義をグループ学習型にした。また、第3回のディベート作業計画から第12回のディベート実施までをプロジェクト学習型とした。

受講生は、前提知識としてOS、メール、MicrosoftOfficeの基本操作を習得済みである。

### 4. 講義の具体的な進め方

講義は、理論の講義とコンピュータ演習の2部からなる。理論の講義を教師が担当し、コンピュータ演習をTAが担当している。コンピュータ演習は、学生の自習を促すために[予習(予習課題)]→[実習]→[復習(実習課題)]のサイクルを基本としている。

#### (1) 講義展開の基本理念

従来は客観主義パラダイムに基づいて講義が展開されていることが多い。客観主義の教育理論では、教師が学生に対し効率的に知識を与えることに重点をおいている。一方、構成主義パラダイムでは、学生が主体的に学習活動に参加し、思考し内省して学ぶことに重点をおいている。

† 専修大学大学院 経営学研究科

我々の教育理念は、構成主義的教育理論に沿っている。この理論に基づいて新たな講義スタイルを展開した。

(2)講義スタイル

本論文での講義スタイルを従来のものと対比させて図1に示す。

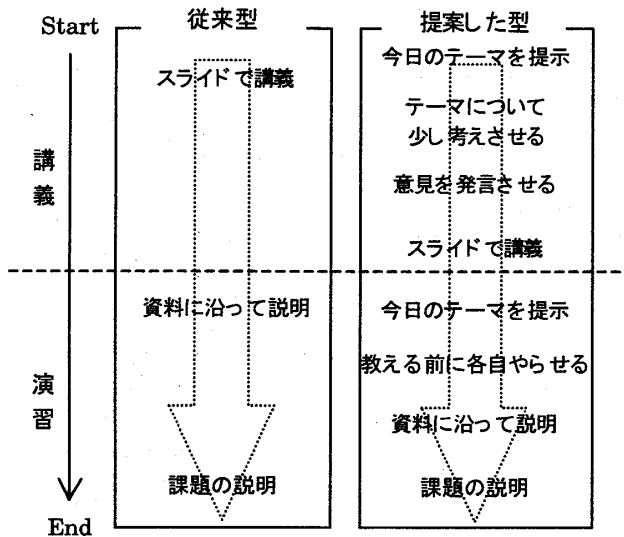


図1 構成主義パラダイムに基づく講義スタイル

左側が従来の講義スタイル、右側が提案したスタイルである。従来は、講義開始と同時にスライドを利用して理論の講義を開始し、スライドによる講義が終了後、TAが実習資料に沿ってコンピュータ演習を行っていた。

本論文でのスタイルでは、受講生とのコミュニケーションを図った。スライド講義の前にテーマを提示し、受講生に講義の全貌を知らせる。また、テーマについて意見交換を行い、講義に参加させることで受講生に主体性を意識させる。コンピュータ演習においても同様に始めにテーマを提示する。一方的に教えるのではなく、各自の作業を進めるようにしている。

情報リテラシ科目は2展開実施する。そこで、一方を客観主義スタイルで、他方を構成主義スタイルで実施して教師や受講者の様子を観察する。観察結果を分析し、両スタイルの有効性や問題点等を分析する。

(3)具体的展開

具体的展開を第5回を例にとって示す。第5回のテーマは「インターネットによる情報の収集と整理」である。講義は、大きく「講義への導入」→「スライド講義」→「コンピュータ演習」→「課題出題」の流れで展開する。

「講義への導入」で、情報収集の必要性和手段、インターネットのメリット・デメリットについて考えさせて講義への意欲や意識を高める。「スライド講義」では一般的な事項を教える。「コンピュータ演習」では、ディベート準備に即した事柄を学ばせる。前期授業でインターネットの基本操作は習得済みなので、ここでは応用事項を学ぶ。実習課題は、ディベートの準備としてインターネットで収集したデータリストを提出させ、ディベート準備が滞らないようにする。予習課題は、『考えてくること』を主にし、学生の負担を軽くする。

表2 具体的展開例(第5回)

講義への導入	テーマについて意見交換 「情報収集はなぜ必要か？」 「情報収集の手段にはどんなものがあるか」 「インターネットのメリットとデメリットは何か」
講義スライド	情報の種類と情報収集の手段 インターネットの仕組み 情報の信頼性(情報倫理)
コンピュータ演習	①演習への導入 「インターネット検索どうやりますか？」 何人かにあててやってみてもらう。 ②操作実習 応用的な事項を教える。 (ファイルのダウンロード、画像の保存、ページの保存、Web-OPACなど)
課題出題	①実習課題 仮立論で欲しいと思ったデータとインターネットで集めたデータのリストをメモ帳で保存し、メールで送信。 ②予習課題(次回テーマは、図書館での文献検索。) 「図書館での文献検索の必要性」および「図書館のメリットとデメリット」を考えてくる。 またWeb-OPACを使って読みたい文献を探して、文献リストにして印刷してくる。

5.評価と今後の課題

(1)研究の評価

「質的データ分析手法」をもちいて研究の評価を行う。前述のように、講義は構成主義パラダイムを適用して構築した。質的データ分析手法は、同じ構成主義パラダイムに基づく分析手法である。

具体的には、観察者として授業を観察し詳細な記録をとる。その記録(テキストベース)を質的データ分析手法で分析する。

(2)今後の課題

本論文では、教育理論に基づき、新しい講義スタイルを展開した。このスタイルの有効性と問題点を明らかにすることが今後の課題である。また、構成主義スタイルの講義のプロセスモデルを構築することも今後の課題である。

6. おわりに

高校教育にも情報科目が取り入れられ、情報リテラシの重要性が注目を浴びている。情報リテラシは、すべての科目の基礎となる能力である。その能力は大学入学以前においても身に付けるべきものである。高校・大学一貫教育制度に情報リテラシ科目を取り入れたい。

参考文献

[1]久保田賢一:質的研究の評価基準に関する一考察—パラダイム論から見た研究評価の視点—、日本教育工学会論文誌、vol21、No3、pp163-173、1997  
[2]久保田賢一:構成主義パラダイムと学習環境デザイン、関西大学出版部、2000年  
[3]魚田勝臣:ニーズから発想した情報リテラシ教育の展開、平成11年度情報教育問題フォーラム pp.25-26、1999.6.  
[4]魚田、大曾根、松永、宮西:目的指向の「情報リテラシ」教育の発想と展開—総論—、IPSJ第60回全国大会3L-4、2000.3.